

この河にのせて、手紙を送ろう。いつか、貴方の立つ岸に届くように。

老人がいるのは、きまってその河だった。岸に繋がれた小舟に座り、河の流れに手をひたしている。もう片方の手には、櫂。老人の仕事は渡し舟を出すことだった。

ある春の日。老人は岸辺で草舟にのせた灯りを流す、ひとりの少女を見とめた。長い髪が風に揺れている。それは村の若い娘なら誰もがやる遊びだった。ただひとつちがったのは、少女の目にある哀しみの色だった。「娘よ、泣くのはおやめ。そして、ここへお座り」

老人は言った。少女はためらったが、逃げなかった。老人の眼に、なにか特別な光を見たのだ。「お前が叶わぬ恋に苦しんでいるのを私は知っている。河を流れているのは、目に見えるものばかりではない。お座り。物語をきかせてあげよう。お前のために、この河が運んできた物語だ」少女は老人のとなりに座った。老人は語り始めた。

むかし、ひとりの山の娘がいた。毎朝河にやってきて水をくむのが、彼女の仕事だった。

ある日、いつものように山から降りてきた娘は、一人の少年に出会った。舟渡しの老人が病気になり、町から呼び寄せた孫だった。少年は町での生活について、色んなことをきかせてくれた。

山に生える薬草のことで機織りについてだったら、彼女は多くのことを知っていた。けれど、町についてはひとつ知らなかった。少年が市場で買ったという飴には色がついていた。町の生活は、きっとこの飴のように美しいのだろうと、娘は思った。

「向こう岸に行ってみよう。見たことのない花が咲いている場所をみつけたんだ」

少年が彼女を連れていったのは、青い花だけが咲く野原だった。そこは山に棲む者たちの間で神様の庭とよばれ、花を摘むことが禁じられている場所だった。

掟を知らない少年は、花を摘んで娘の髪に飾った。娘は息がとまるほど嬉しかったが罪の意識を感じ、岸辺で別れるとき風にさらわれたふりをして河に流してしまった。ただ、ポケットに忍ばせておいた一輪だけは、薬草箱の奥にしまっておくことにした。

それからは春の収穫に追われ、娘が再び河に来ることができたのは、1週間後だった。そこにはもう、あの少年はいなかった。舟渡しの老人は、自分の病が治ったので少年は町に帰ったのだと告げた。

娘は河のほとりで泣いた。青い花を摘んだ罰だと想った。それからは夏も、秋も、彼女の眼に山の美しさは映らなくなった。岩場を宝石のように飾る花も実も、少年のことを想うと空しいだけだった。

冬。娘は全ての思い出を機に織り込んだ。春になったらこれを河に流して、全てを忘れてしまうのだ。

春。張り裂けそうな想いで、娘は雪解けの水に布を広げた。

すると、不思議なことが起きた。河の流れに溶け出した色が、きらきら光る文字を結びはじめたのだ。

「今こそ、河を渡れ」

水にはそう記されていた。河やみずうみに神様が印をあらわすことがあるという、村の年寄りたちの話を娘は思いだした。見れば、嵐で倒れた松の木が河に横たわっていた。誰かがやってくる馬の鈴の音も聞こえてきた。はやる心を抑えながら、娘は向こう岸に渡りはじめた。

この河を渡ることは、きっといつでもできたのだと、想いながら。

舟渡しの老人は、物語を終えていた。少女の涙も乾いていた。河が運んできた物語。それは確かに彼女の物語だった。

「お前の河を渡りなさい。生きるとはそういうことだよ」

少女は河を見つめた。そこには、彼女だけに見える言葉が結ばれていた。